

[資料]明治三陸津波の写真記録の全体像

社団法人共同通信社写真データ部嘱託* 沼田清

An Overview of the Records of Meiji Sanriku Tsunami Photographs

Kiyoshi NUMATA

Photo data section of Kyodo News Service, 1-7-1 Higashi-Shimbashi, Minat-ku,
Tokyo, 105-7201 Japan

The Meiji Sanriku Tsunami triggered by a huge earthquake on June 15, 1896, left 22,000 people dead. Photographic records of the tragedy had been widely believed to be scarce. The author started research on the subject in May 2012 after examining 48 photos of the tsunami in photographer Matsuchi Nakajima's albums, which have been held by antique photo collector and researcher Keisho Ishiguro. I found that a total of 25 photographers from Miyagi, Iwate and Aomori prefectures as well as Tokyo and surrounding prefectures went to the disaster region. About 250 photos taken by 11 photographers were published, and a certain number of those photos were confirmed to have been kept as photographic plates and prints at the Morioka Local Meteorological Office, the Imperial Household Agency's archives, the Japan Red Cross Society and other locations. This paper is an overview of the findings to help scholars on the history of disasters find pertinent photographs.

Keywords: Meiji Sanriku Tsunami, photographer.

§ 1. はじめに

1896(明治 29)年 6 月 15 日に発生し 2 万 2 千人が犠牲になった明治三陸津波の写真記録は従来、少ないと言われてきた。筆者は 2012 年 5 月、古写真研究家の石黒敬章氏が所蔵する中島待乳アルバムの明治三陸津波写真(全 48 枚)の点検を契機に調査を始めた。その結果、被災した宮城、岩手、青森の 3 県はもちろん、東京とその周辺からも併せて 25 人の写真師が現地入りし、その内の 11 人が撮った約 250 枚の写真が世に出て、一部は原乾板やプリントで盛岡地方気象台、宮内庁書陵部、日本赤十字社などに残っていることを確認した。以下にその全体状況を報告する。災害史の研究者が資料写真を入手する際の一助になれば幸いである。

§ 2. 三陸入りした写真師

明治三陸津波が発生したときの写真師の動きを調べた。

津波発生から半月後、写真雑誌『写真新報』第 82 号[玄鹿館(1896)]は次のように書き、写真師の奮起を促した。「海嘯 此回釜石近傍を襲ひたる海嘯は實に其威猛烈にして古来稀に見し程に損害を醸したりと云ふ 嘗て濃尾の震災あるや寫真師は走せ行きて

其有様を撮影せるも此回は何故か被害地に出張する寫真師少し 又幻燈會等を催し義捐金を募る等の舉に出する人あるを聞かず 其災害の大なるに引替へ世人の注意を惹くことの少なるは一奇と云ふへし」。

しかしこれは実態と大きく異なる。すでに 6 月末には地元はもちろん東京とその周辺からの出張者も含め、20 人を超す写真師が三陸沿岸に展開していた。

背景には、写真の方式が湿板から乾板に切り替わっていたことが大きい[金子(2005)]。感材の調整や現像処理を撮影現場でやらなくて済み、機材一式はコンパクトになり、機動性が一気に高まった。写真師はスタジオから解放され突発の遠隔地へも撮影に出かけられるようになった。後述の大橋乙羽(博文館)は、宮城県内被災地のルポ「蒼田碧海録」で、乾板の入れ替え場面を記述している[大橋(1896a)]。

彼等の名前と動静は、被災 3 県の地元紙 5 紙(宮城県の奥羽日日、東北新聞、東北日報、岩手県の岩手公報、青森県の東奥日報)の記事や広告と、行政の記録文書『岩手県陸中国南閉伊郡海嘯紀事』の『釜石臨時救恤事務所日誌』[岩手県西南閉伊郡役所(1896a)]、雑誌『太陽』[大橋(1896b)]などの記述から判明した(表 1 参照)。

以下にその写真師たちを紹介する。太字は写真の

* 〒105-7201 東京都港区東新橋 1-7-1
電子メール: hqi4832@u08.itsc.com.net

絵柄が何らかの形で残っている者である。

宮城県

国府留蔵(仙台), 江志直之進(気仙沼), 渡辺常次郎(石巻)。

岩手県

末崎仁平(鉾ヶ崎), 高橋信三郎(盛岡), 高橋直寿(一関), 柳井宏太郎(久慈), 千葉俊二郎(陸前高田), 宮沢治三郎(花巻, 宮沢賢治の叔父)。



a) b) c)
図1 肖像写真の現存する写真師. a 末崎仁平
b 高橋直寿, c 宮内幸太郎(宮内幸雄氏提供)
Fig.1a Nihei Matsusaki, b Naoju Takahashi,
c Kotaro Miyauchi(Courtesy of Yukio Miyauchi)

青森県

清雅堂(八戸, 本名不明)。

東京市

大橋乙羽(博文館), 込山英松(浅草), 宮内幸太郎・福原脩・大橋賢之甫(大日本写真品評会), 豊田藤吉・吉川源三郎・斎藤深太郎(小川製版所), 鶴淵初蔵(浅草・幻灯製作販売業者)。

その他

- ・高崎市 江原竹次郎・江原熊太郎・伊藤方直。
- ・横浜市 小川佐吉(日下部金兵衛の女婿小川佐七か), オットー・フォルベール(Otto Vollbehrr, 居住地 77 番地のドイツ人)。
- ・山梨県 樋口桃雲(甲府)。

以上を, 幕末から昭和の写真関係者人名録『日本写真界の物故功労者顕彰録』[日本写真協会(1952)]で搜すと, 大橋乙羽, 宮内幸太郎, 江原熊太郎, 樋口桃雲以外は載っていない。ほとんどが無名の人だ。

地域別にみると地元写真師, とりわけ岩手県の写真師の奮闘ぶりがうかがえる。それに比べ宮城県は国府と江志だけで寂しい。仙台の写真界で著名な遠藤陸郎・誠兄弟やその弟子たちが出動していないのが解せない。

惨状を記録するため三陸の被災地に駆けつけた写真師の狙いは, 報道・出版, 写真販売, 幻灯種板販売など, 営利目的が主である。そのことはその後の

新聞に出た頒布広告で裏付けられる。しかし仙台の国府の場合は仏教系の仙台慈善会から委嘱を受けての出張であった。そのため犠牲者を供養する僧侶の姿を各地で押さえているし, 負傷者や傷病者の姿をまめに記録していて, 他の写真師とは一味違う(図8, 図21)。

各写真師のカバーエリアは, ほとんどが1県のみにとどまっている。それだけ大変な出張であったと思われる。国府が宮城県内を撮影した後仙台に戻り, 3日後には岩手県の釜石へ向かいさらに取材しているのは例外的だ。日清戦争に従軍取材した国府ならではの頑張りだ。高崎の江原竹次郎は宮城県に続いて岩手県も目指して, 一関到着の記録はあるが, 岩手県分の写真は残っていない。

上掲の25人中には, 震災予防調査会から現地調査を委嘱された理科大生の伊木常誠(いき・つねなか)を入れていない。

伊木の報告書『三陸地方津浪実況取調報告(参照第一)』[伊木(1897)]に掲載した写真5枚は, 伊木本人の撮影と思われてきた。しかし第三図「陸前國仙郡細浦」と同一図柄の翻刻版画が, 伊木の出張中の7月2日付東京日日新聞に「気仙郡末崎細浦被害の図(扱写真)」として掲載されている[東京日日新聞(1896)]ことから, 伊木の撮影はあり得ない。伊木は, 6月28日に照井政太郎名で東京紙に広告が出た一関の高橋直寿の写真を購入したと思われる。

表1で11人の写真師の活動状況と, その後の写真の掲載や, 頒布広告の掲載状況を示した。また図2の地図で各写真師の被災地への展開状況を示したので参照されたい。

§3. 写真の所蔵先と掲載刊行物

写真の実物や図柄は現在, 次の機関や施設に残っている。またそれらを掲載した刊行物が関係機関や主要図書館にある(表2参照)。

3.1 岩手県立博物館

岩手県立博物館が所蔵する明治三陸津波写真は2020年3月に, 盛岡地方気象台から寄贈されたものである。

鉾ヶ崎町の末崎仁平が被災の翌日から撮影した鉾ヶ崎の被災状況13枚と田老浜の2枚の写真が, 盛岡地方気象台にキャビネのガラス乾板で残っていた(図3)。他にも手札の複写乾板やプリントなどで全体は21カットある。ただし写真説明はなかった。1997年

表 1 明治三陸津波における写真師 11 名の活動状況

Table 1 The activities of 11 photographers who covered the Sanriku Tsunami in 1896

	国府留蔵 (仙台)	江志直之進 (気仙沼)	高橋直寿 (一関)	末崎仁平 (鍛ヶ崎)	高橋信三郎 (盛岡)	柳井宏太郎 (久慈)	清雅堂 (八戸)	大橋乙羽 (東京・博文館)	宮内幸太郎 (東京)	込山英松 (浅草)	江原竹次郎 (高崎)
6 月	6/19 仙台発志津川方面へ	6/22 東北日報の松本新記者と唐桑へ向かう	6/17 釜石を撮影	6/16 鍛ヶ崎を撮影	6/23 山田警察に寄る	6/16 久慈を撮影		6/18 上野発 6/19 夕刻、志津川着 6/21 陸前石越発 6/22 午後帰京 6/26 志津川の写真一式を宮中に献納		6/25 大船渡盛に 6/27 釜石に	6/20 仙台発志津川方面へ 6/23 一関に
15 日夜津波発生	6/25 仙台に帰着		6/27 報知が釜石、東京日日が広田村の版画掲載 6/28 時事新報と中央新聞に広告(照井政太郎名)	6/27 萬朝報に版画4枚掲載 6/28 東京日日と萬朝報に版画掲載 6/30 萬朝報と岩手公報に広告							
7 月	7/3 仙台に帰着 7/4 東京日日に志津川病院の版画掲載 7/5, 6, 10, 12 仙台で義捐幻灯会 7/12 東園侍従が写真買い上げ 7/17 仙台慈善会が写真献納 7/18, 20, 22 東北日報に広告 7/19~22 奥羽日に広告 7/22 東北新聞に釜石尾崎神社の版画掲載		7/1 東京日日と毎日に末崎村細浦の版画掲載 7/2 東京日日に末崎村細浦と広田村の版画掲載 7/初め, 東園侍従に献納 7/15 東京朝日別刷り付録に2枚掲載 7/20『太陽』に13枚掲載	7/1 東京日日と萬朝報に版画掲載 7/1~6 岩手公報に広告 7/4, 5 時事新報に広告 7/11, 12 東京日日に広告	7/14~16 東京日日に広告	7/7 東京日日に版画掲載 7/9 萬朝報に版画掲載 7/14 岩手公報に広告	7/18, 19, 21, 23 東奥日報に広告	7/5『太陽』に志津川方面の写真25枚とルボ「桑田碧海」を掲載	7/2 仙台発志津川へ 7/8 釜石に 7/9 遠野へ	7/1 帰京 7/4 中央新聞に捏造津波石の版画掲載 7/5, 7 萬朝報と毎日新聞に版画掲載 7/15 東京朝日別刷り付録に5枚掲載, 捏造津波石写真も 7/19 特派員談話を主催 7/20『太陽』に13枚掲載, 捏造津波石も	7/4 萬朝報に版画掲載 7/5, 11 東京で幻灯会 7/15 東京朝日朝日別刷り付録に6枚掲載 7/21 東京朝日に広告 7/24 東京で幻灯会
8 月 9 月				9 月, 宮中への写真献納を申請し, 11月初めに聴許された				8/8 英紙 the Graphic に転載 8/8 米ニューヨークの Harpers Weekly に転載	9/12 写真品評会総会で写真を披露		8/5『太陽』に16枚掲載

(※新聞本紙の掲載は東京朝日別刷り付録以外はすべて翻刻版画)

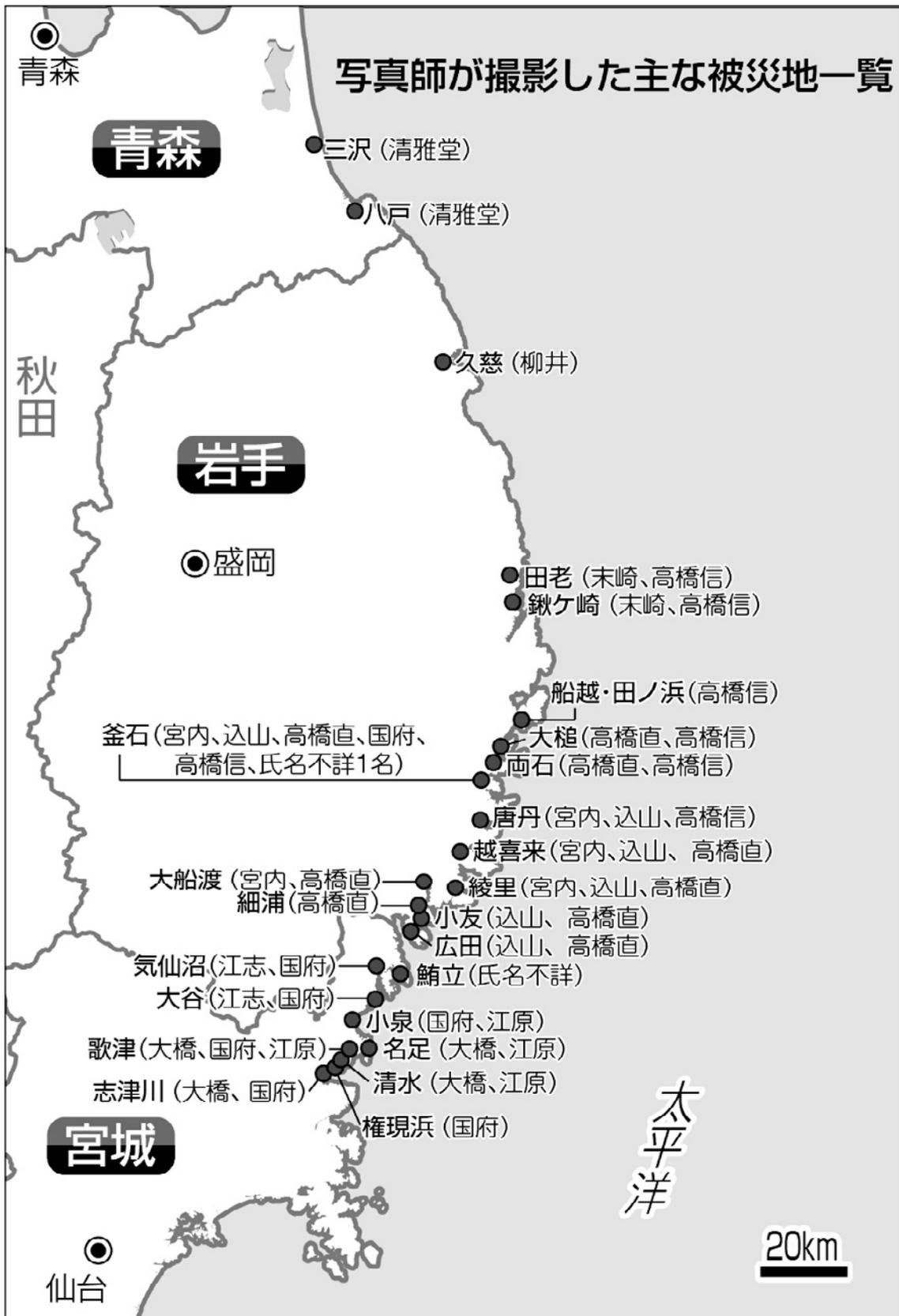


図2 明治三陸津波で写真師が撮影した主な被災地一覧

Fig.2 Major devastated areas photographed by the 11 photographers after the Sanriku Tsunami

の盛岡庁舎建て替へと、2007年の宮古測候所閉鎖の際の点検で見つかった。同測候所が末崎仁平に撮影を委嘱したか、後に買い取ったと思われる。

早い始動と、卓越した撮影技量と処理技術で、生々しい現場が鮮明に記録されている。明治三陸津波の原板ネガが残るのはここだけで、災害史と写真史の両面で大変貴重である。

これとは別に高橋直寿撮影の釜石・石應寺に運び込まれた遺体群の写真のキャビネ複写乾板もあった。複写だが鮮明度は高い。



図 3 盛岡地方气象台に残った末崎仁平撮影写真の原乾板とプリント

Fig.3 Photographic plates and prints of photographer Nihei Matsusaki's photos, housed at the Morioka Local Meteorological Office.

3.2 日本カメラ財団

古写真収集家の石黒敬章氏の父、石黒敬七氏が1956年に明治の写真師中島待乳の遺品を一括購入した際、大型カメラや幻灯機とともに8冊の写真台帳があった。その一冊に手札の48枚の明治三陸津波写真が張られていた。大船渡から釜石方面を記録しており、全てに場所と状況が記されていて資料価値が高い。「中島待乳アルバム」と呼ばれている[石黒(2013)]。災害史の北原糸子氏と石黒氏のやり取りでこの存在が判明し、2012年5月に共同通信から紹介記事を出し、全国の新聞に大きく報道された。

写真には日付と撮影者名は書かれていなかったが、中島の甥で弟子の宮内幸太郎の撮影と判明した(§4)。その後、石黒氏は写真一式を日本カメラ財団に寄贈した。

3.3 宮内庁

被災した3県から宮中への報告書に添付したものや、献納されたものが、宮内庁に計193枚所蔵されて

いる。資料の由来や性格から宮内庁内の所蔵先は書陵部図書寮文庫、書陵部宮内公文書館、三の丸尚蔵館の3つに分かれる。公的 성격のものは前2館に、天皇の私物とされ侍従職保管であったものは三の丸尚蔵館に振り分けられている[白石(2016)]。

近年は、「書陵部所蔵資料目録・画像公開システム」が構築され、所在情報データベースとして機能しており、調査が済んだものの一部は、ここに画像が貼り付けられ、閲覧とダウンロードができる。

なお宮内庁所蔵写真には、後述の高橋信三郎以外は写真師名の記載がない。

3.3.1 書陵部図書寮文庫

書陵部図書寮文庫には、明治の災害記録写真アルバム『諸国災害実況写真』(表紙タイトルは「風水害之写真」, 函架番号 B9・33)があり、明治三陸津波は計143枚を収容している。筆者が数年かけてやっと巡り会えた写真の大半が、この1冊に納まっている。国府留蔵の68枚、高橋直寿の45枚を双壁に、末崎仁平の19枚、柳井宏太郎の6枚、清雅堂の5枚があり、被災3県を十分カバーしている。

これとは別に『各種写真第1帖』(函架番号 B9・32)[武部(2000)]があり、高橋直寿の岩手県内の12枚と、国府留蔵の宮城県内の17枚を収容しているが、内容は『諸国災害実況写真』と重複している。

国府の写真が多いのは、宮城県が報告書に添付したと思われるものと、宮中へ献納したものと、勅使として派遣された東園基愛侍従が現地で購入したものなど同一写真が3セット集まっていることによる。その経緯が7月15日付東北日報に記されている[東北日報(1896a)]。また、筆者の知る限りここでしか見られない高橋信三郎の写真帖『岩手県下海嘯被害地写真』(全14枚, 函架番号 B1・146)が、公開システムで閲覧、ダウンロードができる[高橋(1896)]。

3.3.2 書陵部宮内公文書館

書陵部宮内公文書館には、「海嘯被害図」(識別番号 54681)として唐桑半島各集落の5枚(撮影者不明)と、高橋直寿が撮影した釜石の石應寺などの2枚があり、公開システムにより閲覧、ダウンロードができる[書陵部宮内公文書館(1896)]。

3.3.3 三の丸尚蔵館

三の丸尚蔵館の収蔵品は、本来、天皇の私物であった御物が国庫に納められたものである。その多くを

占める美術品などは時々公開展示されているが、それ以外の史料は非公開が多い。大橋乙羽の写真は、書陵部資料『分門件銘簿』の明治 29 年の項に献納記録があるが、まだ見つかってない。ここでプリントの実物が発掘されることを期待している。

3.4 日本赤十字社と看護大学

明治三陸津波の発生で日本赤十字社(日赤)は被災各地に医師・看護婦を派遣し、仮病院を開設して被災者の救護に当たった [川原(2011)]。

その折の記録として収集した国府留蔵の宮城県内各地と末崎仁平の鉾ヶ崎の写真が、日赤豊田看護大学と日赤看護大学(広尾)に残っている。

2012 年秋、日赤豊田看護大学の図書館を訪ね、国府留蔵の志津川方面写真など 6 枚を確認した。その内の 5 枚は国府留蔵の名前が付いていた。これによって後に宮内庁所蔵の同一写真の裏付けが得られた。写真の所有者は博物館明治村で、同図書館に寄託して研究者に公開している。

日赤看護大学を 2013 年夏に訪問し、史料室で末崎仁平の鉾ヶ崎写真、宮古での日赤看護婦記念撮影など 8 枚を確認した。史料室はその後「所蔵史料データベース」を立ち上げた。「津波」で検索すると死体写真を除く 6 枚がヒットする[日本赤十字看護大学(1896)]。

日赤本社は、津波関連写真の所蔵は少ないが、各看護大学に分散した写真を把握しデータベースに納めている。このデータベースは日赤内だけの運用で、赤十字情報プラザでレファレンスに対応している。

日赤の所蔵写真は、当時の編集者に知られていたようで、大正期や昭和初期に発行された明治回顧の出版物に、「日本赤十字社提供」として引用されている。

3.5 八戸市立南郷図書館

郷土史家の中里進氏が集めた郷土史資料の中にあった明治三陸津波写真を所蔵している[中里(1980)]。青森県八戸の清雅堂撮影と推定される三沢や八戸の写真 19 枚である。複写ネガのため階調に乏しく不鮮明だが、15 枚はここにしかなく貴重である。

青森県以外にも、岩手県の柳井宏太郎の久慈や、高橋直寿の釜石などの複写物も計 11 枚あった。

3.6 宮古の出版社「タウン情報社」

宮古の出版社「タウン情報社」が市内の旧家から出

たという末崎仁平の鉾ヶ崎の写真を、台紙張りの状態のよい印画で 17 枚所蔵している(図 4)[橋本(2013)]。裏面に活版印刷の写真説明と住所氏名が張られていて、宮内庁所蔵の同一写真の裏付けが得られた(図 10)。



図 4 「タウン情報社」所蔵の末崎仁平が撮影した鉾ヶ崎の写真プリント

Fig.4 Photos of heavily devastated Kuwagasaki town in Iwate Prefecture taken by Nihei Matsusaki. They are pasted on mounts. (Collection of Miyako City publisher Town News)

3.7 唐桑半島ビジターセンター

気仙沼の鈴木左夫氏が提供した唐桑半島の 10 枚を所蔵し、9 枚を展示している。いずれも複写写真で、4 枚は「気仙沼写真師江志」の名入り台紙に張られていた。「江志」とは、被災当時の 6 月 23 日付東北日報[東北日報(1896b)]に、松本新記者が「当地(気仙沼)の写真師江志直之進氏を伴ひ之より唐桑に向かはんとす」と書いたものと符合する。残り 5 枚は宮内公文書館の「海嘯被害図」と同一のものであり、撮影者は不明である。

3.8 出版物で残っているもの

博文館の雑誌『太陽』7 月 5 日号は、編集者の大橋乙羽が自ら出張し撮影した宮城県志津川の写真(図 5)とルポをいち早く掲載した。さらに 7 月 20 日号、8 月 5 日号[大橋(1896c)]と 2 回にわたって 3 人の写真師による写真を巻頭に掲載した。乙羽の写真は宮中に献納されたがプリントはまだ確認されていない。



図 5 雑誌『太陽』に掲載された大橋乙羽撮影の宮城県志津川の惨状写真

Fig.5 Photographer Otowa Ohashi's disaster photos of Shizugawa town in Miyagi Prefecture, which appeared in the magazine Taiyo.

なお写真の新聞への掲載と海外紙・誌での転載については、それぞれ「§ 5. 写真と翻刻版画」、「§ 6. 海外での転載」で別途記述する。

3.9 幻灯種板で残っているもの

写真師の撮った写真から幻灯種板が製作、販売され、あちこちで義捐幻灯会が開かれた。

仙台市博物館には高橋直寿、込山英松、八戸の清雅堂の写真を基にした彩色種板が 12 枚残っている(図 6)。津波デジタルライブラリ[津波デジタルライブラリ(2004)]で公開している。



図 6 込山英松撮影写真から作られた幻灯種板(仙台市博物館蔵)

Fig.6 Lantern slides of photos taken by photographer Hidematsu Komiyama. (Sendai City Museum Collection)

2016 年 1 月、横浜開港資料館で中島待乳アルバム中の 10 枚が彩色種板で残っているのを見つけた(図 7)。濃尾地震の種板の塊に紛れ込んでいて、2 枚は濃尾地震と誤っていたし、5 枚が裏焼きであった。中島待乳の製作を示す「東京呉服橋待乳園」のシールが張ってある。アルバムを所蔵していた石黒敬章氏はそれまで、「待乳アルバムの津波写真は利用されることなく死蔵されていた」と認識していたが、幻灯普及の推進者の一人であった待乳が、間違いなく種板を製作、販売していたことが判明し喜んでくれた。

また早稲田大学演劇博物館は彩色版画の種板 13 枚を所蔵している。2 枚は想像図だが、残り 11 枚は写真から版画に翻刻して彩色したものである。9 枚は朝日新聞の別刷り付録からの翻刻と思われる。同館のデジタルアーカイブの「幻灯データベース」で公開されている。ただし、検索は「地震」と入れないとヒットしない。



図 7 宮内幸太郎撮影写真から作られた幻灯種板(横浜市開港資料館蔵)

Fig.7 Lantern slides of photos taken by photographer Kotaro Miyauchi. (Yokohama Archives of History Collection)

表2 明治三陸津波の写真資料の所蔵先一覧

Table 2 The list of photographic archive of the Meiji Sanriku Tsunami

	組織・施設	連絡先	所蔵内容
1	岩手県立博物館	〒020-0102 岩手県盛岡市上田字松尾屋敷 34 電話 019-661-2831	盛岡地方気象台から寄贈された末崎仁平の鯨ヶ崎と田老の写真 15 枚のキャビネ原乾板。複写ネガと印画で計 21 カットあるが写真師名と写真説明はなかった。
2	唐桑半島ビジターセンター	〒988-0554 宮城県気仙沼市唐桑町崎浜 4-3 電話 0226-32-3029	江志直之進の唐桑の写真 5 枚の複写ネガ。 撮影者不明の唐桑の 5 枚の複写ネガ。
3	宮内庁 書陵部図書寮文庫 書陵部宮内公文書館	〒100-8111 東京都千代田区千代田 1-1 電話 03-3213-1111(代表)	『諸国災害実況写真』や『各種写真第 1 帖』等に国府留蔵、高橋直寿、末崎仁平、柳井宏太郎、八戸の清雅堂の写真。印画で計 193 枚。被災 3 県を網羅している。高橋信三郎の写真帖『岩手県下海嘯被害地写真』はデータベースで閲覧とダウンロードができる。
4	国会図書館	〒100-8924 東京都千代田区永田町 1-10-1 電話 03-3581-2331(代表)	英紙『The Graphic』1896 年 8 月 8 日号 『日本歴史写真帖近古の巻』(1914 年刊) 『幕末・明治・大正回顧八十年史第 5 輯』(1933 年刊)
5	三康図書館	〒105-0011 東京都港区芝公園 4-7-4 照明会館 1F 電話 03-3431-6073	『岩手県陸中国南閉伊郡海嘯紀事』 博文館の雑誌『太陽』1896 年 7 月 5 日号, 7 月 20 日号, 8 月 5 日号, 『文芸倶楽部増刊号・海嘯義捐小説』
6	仙台市博物館	〒980-0862 宮城県仙台市青葉区川内 26 電話 022-225-3074	込山英松, 高橋直寿, 清雅堂の写真的彩色幻灯種板計 12 枚。
7	日本カメラ財団(JCII)	〒102-0082 東京都千代田区一番町 25 電話 03-3263-7111(代表)	宮内幸太郎が撮影した釜石と大船渡方面の写真。印画で 48 枚。中島待乳アルバムに所載。
8	タウン情報社 「みやこわが町」を出版	〒027-0037 岩手県宮古市松山第 5 地割 13-6 電話 0193-64-0888	末崎仁平の鯨ヶ崎の写真 17 枚, 印画は台紙張り, 裏面に写真説明と末崎の名前あり。
9	日本赤十字社本社 赤十字情報プラザ	〒105-8521 東京都港区芝大門 1-1-3 電話 03-3437-7580	看護大学に分散した写真資料の所蔵状況を把握している。データベースは公開していないが, 赤十字情報プラザでレファレンスに対応している。
10	日本赤十字看護大学 史料室	〒150-0012 東京都渋谷区広尾 4-1-3 電話 03-3409-0875(代表)	末崎仁平の鯨ヶ崎の写真, 印画で 6 枚, 裏面に末崎の名前あり。所蔵史料データベースで 4 枚を公開。
11	日本赤十字豊田看護大学 付属図書館	〒471-8565 愛知県豊田市白山町七曲 12 番 33 電話 0565-36-5119	国府留蔵の志津川の写真, 印画で 5 枚, 国府の名前あり。(博物館明治村からの寄託資料)
12	八戸市立南郷図書館	〒031-0111 青森県八戸市南郷大字市野沢 字中市野沢 39-1 電話 0178-60-8100	清雅堂撮影の八戸と三沢方面の写真 19 枚の複写ネガ。そのうちの 15 枚はここにしかないもの。 他に高橋直寿の釜石と, 柳井宏太郎の久慈の写真の計 11 枚も(いずれも中里進氏収集の複写資料)
13	防災専門図書館	〒102-0093 東京都千代田区平河町 2-4-1 日本都市センター会館 8F 電話 03-5216-8716	国府留蔵の写真を翻刻した彩色版画 16 枚を掲載した報告書『日本赤十字社宮城支部海嘯救護記事』。
14	横浜開港資料館	〒231-0021 横浜市中区日本大通 3 電話 045-201-2100	宮内幸太郎の釜石の写真の彩色幻灯種板 10 枚。
15	早稲田大学演劇博物館	〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1 電話 03-5286-1829	高橋直寿の大船渡と釜石や, 江原竹次郎の唐桑と志津川の写真を版画に翻刻した彩色幻灯種板 13 枚。

§ 4. 撮影者の特定手順

個々の写真の撮影者を知ることが重要である。筆者は、以下の手順を経て特定した。

4.1 写真に名前を明記

写真に名前があるものは、そのまま採用した。例えば写真の下部に名前が焼き込んであるもの(国府留蔵, 図 8), 裏面に名前入りの印刷物が張ってあるもの(末崎仁平, 図 10), 名前入りの台紙に張ったもの(江志直之進), 写真帖の表紙に名前が明記されたもの(高橋信三郎)である。



図 8 写真説明と撮影者の国府留蔵の名が付いた宮城県志津川の惨状写真(日赤豊田看護大学蔵)
Fig.8 A photo of devastated Shizugawa town in Miyagi Prefecture taken by photographer Tomezo Kunifu. An explanation and Kunifu's name were printed at the bottom of the photo. (Collection of the Japan Red Cross Toyota College of Nursing)



図 9 末崎仁平が撮影した岩手県鉾ヶ崎町の惨状(岩手県立博物館蔵)
Fig.9 A photo of devastated Kuwagasaki town in Iwate Prefecture taken by Nihei Matsusaki. (Collection of Iwate Prefectural Museum)

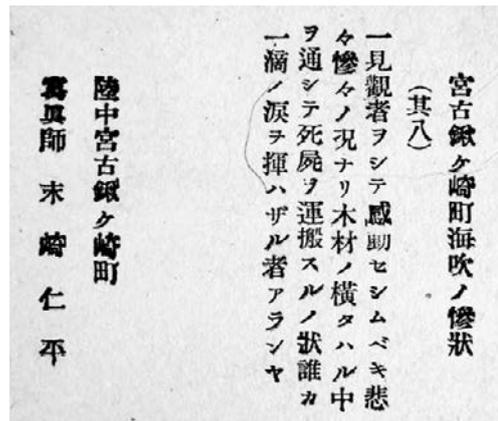


図 10 タウン情報社所蔵で、図 9 と同一の写真の裏に張られていた末崎仁平の名入りの写真説明

Fig.10 A caption signed by Nihei Matsusaki pasted on the back of the same photo of Fig9, owned by Miyako City publisher Town News.

4.2 『太陽』は撮影者名を明記

『太陽』の掲載は撮影者名が明記されており、それを採用してきた。しかし、第 15 号(7 月 20 日号)掲載の「照井政太郎」は誤りで、正しくは「高橋直寿」であると 1 か半月後の第 18 号(9 月 5 日号) [大橋(1896d)] に、正誤通知が出ていることが、徳島大会(2019)で判明した[高岸, 私信]。

想定外の話だったが、照井の写真が高橋直寿のものだと分かって、疑問が一つ解けた。それは朝日新聞が別刷り付録発行の前後、しきりに直寿の協力をうたっていたのに、特集号には該当するものがなかった。照井を直寿と置き換えたらすっきりと説明が付いた。

4.3 新聞・雑誌の記事・広告、行政文書からの推定

宮内幸太郎は、『岩手県陸中国南閉伊郡海嘯紀事』の『釜石臨時救恤事務所日誌』[岩手県西南閉伊郡役所(1896b)]の 7 月 9 日の項に釜石来訪の記述があった。さらに 10 月 23 日発行の大日本写真品評会の会報『写真雑誌第 12 号』[大日本写真品評会(1896)]に、「侯爵徳川会頭閣下の歓迎会(9 月 12 日・柳橋亀清楼)」で、「福原脩, 宮内幸太郎, 大橋賢之甫の三氏が撮影に係る三陸大海嘯の惨状并の本邦の風景映画を観覧に供せられ孰れも万座の余興を添えて拍手喝さいを博したり」という記事で特定された。

八戸の清雅堂は、7 月 16 日の東奥日報[東奥日報(1896)]に「県下海嘯被害地の惨状は八戸の某写真師撮影したる由」の記事があり、18 日～22 日には以下の頒布広告が同紙に掲載されたこと、他の写真師の名が出ていないことから特定した。

「大海嘯被害写真発表
一、青森県分揃へ
一、三陸分揃へ一式
青森県八戸町長横丁
写真士 清雅堂」

同様にして、久慈の柳井宏太郎は、彼以外に久慈の写真の広告を出している写真師がいないことから判断した。

4.4 塊の状態から推定

書陵部の所蔵写真は、高橋信三郎の写真帖以外には名前が記されていない。しかしプリントのサイズやタテヨコ比、階調と質感、地名表記の癖(釜石を西閉伊郡とするか南閉伊郡とするかの違い)などの特徴から幾つかの固有の塊に分類される。塊の中の数枚が前述の方法で特定されたら、全体を同じ写真師のものと類推した。この手法は国府留蔵と高橋直寿に適用した。

§ 5. 写真と翻刻版面

写真師が撮った写真は、プリントで販売され流布した。被災県から政府・宮中への報告書にも添付された。絵などよりもはるかにリアルな写真は重宝されたであろう。さらに写真が出版物や幻灯種板になって惨状を広く伝えたことは 3.8 と 3.9 で述べた。

一方、軒並み特派員を現地に派遣した各新聞も、写真報道では雑誌『太陽』の後塵を拝した。当時の新聞は、輪転機による写真印刷が技術的に黎明期で、階調を出す網点印刷が出来ず、版面に翻刻して印刷するしかなかった(図 11)[佐藤(1980)].



図 11 1896 年 6 月 28 日付東京日日が掲載した末崎仁平の銚ヶ崎の写真の翻刻版画

Fig.11 The block print of devastated Kuwagasaki town in Iwate prefecture carried by Tokyo-nichinichi on June 28 in 1896.

東京朝日新聞(1896)は、平板印刷機で写真印刷して 7 月 15 日に別刷り付録『大陸東海岸大海嘯被害図』として配布した[朝日新聞社(1990)]. 自社に写真師はおらず、高橋直寿、込山英松、江原竹次郎らの写真 23 枚で構成した(図 12).



図 12 1896 年 7 月 15 日の東京朝日新聞が付録で報じた津波写真特集『三陸東海岸大海嘯被害図』
Fig.12 The Tokyo Asahi Shimbun published a special supplement of tsunami photos on July 15, 1896.

津波から 2 年後に作成された報告書『日本赤十字社宮城支部海嘯救護記事』[日本赤十字社宮城支部(1898)]には 32 枚の彩色版画が載っていて、16 枚は国府留蔵の写真を翻刻したものである。これには、書陵部所蔵の同一図柄写真にはない詳細な説明が記されている(図 13).



図 13 日本赤十字社宮城県支部が報告書に掲載した国府留蔵の写真(図 8)から翻刻した版画(防災専門図書館蔵)

Fig.13 The block print in the report of Miyagi Branch of Japanese Red Cross (Disaster management Library collection).

§ 6. 海外での転載

明治三陸津波の惨状は海外でも報道された。次の三紙・誌は写真入りで伝えた。

米ニューヨークの新聞『HARPER'S WEEKLY』の1896年8月8日号が、雑誌『太陽』の大橋乙羽の写真9枚を転載した[岩手日報(2012)].

ロンドンの画報紙『The Graphic』の8月8日号も同様に乙羽の写真6枚を転載した(図14)[林(2014)].

同年9月発行の米誌『National Geographic』は、日本滞在中の通信員、Eliza R. Scidmore が入手した写真4枚を記事とともに掲載した[Scidmore(1896)]. その内の2枚は撮影者不明だが、東京朝日新聞の別刷り付録と同一の写真である。

なお、Scidmore は記事を書くに当たり現地には行ってないと思われる。確かに8月15日に宮城県松島を訪問したことが奥羽日日に報道されているが、物見遊山であるし、これでは時間的に9月号には間に合わない。もし発生直後に現地入りしていたら、その動静は各紙に報じられていたはずだが、悉皆調査しても1行も見つかっていない。

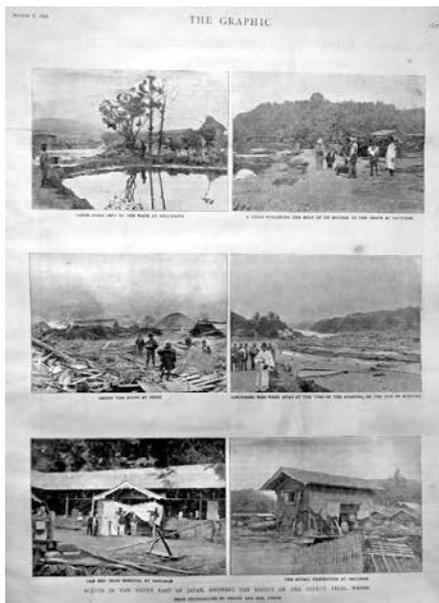


図14 大橋乙羽の写真を転載した英紙 The Graphic 1896年8月8日号(国会図書館蔵)

Fig.14 British weekly newspaper The Graphic in its Aug. 8, 1896 edition carried photos taken by Otowa Ohashi. (National Diet Library Collection)

§7. 後世の出版物

2万2千人が犠牲になった未曾有の大惨事は、その後も関係者に語り継がれ、その写真は歴史の本に登場している。以下に例を挙げる。

『日本歴史写真帖 近古の巻』[秋好(1914)]は、

1896年7月15日の東京朝日新聞別刷りからの転載で12枚を掲載するが、ソースも写真師名もない。

『幕末・明治・大正回顧八十年史第5輯』[東洋文化協会(1933)]の「三陸大海嘯」は、国府の宮城県の写真4枚を掲載し、写真説明の後に「仙台市名掛町国府留蔵撮影(日本赤十字社蔵)」とクレジットを入れている。

『星霜百年』[日本赤十字社宮城県支部(1987)]. 国府の宮城県の写真4枚を掲載し、写真師名はない。

『明治の日本』[武部(2000)]. 書陵部図書寮の『各種写真第1帖』の中から宮城県の被災分6枚を掲載している。しかし撮影者の国府の名前はない。

§8. 撮影地の特定

120余年も昔の写真は、その真実性に不安がつきまとう。込山英松が「唐丹の津波石」を捏造した例もある[沼田(2018)].

写真師は混乱した現場を巡り、多数の乾板で撮り溜め、持ち帰ってまとめて現像する。ロールフィルムではないので順番が狂ってもおかしくない。ちなみに中島待乳アルバムを精査したら、48枚中に撮影地の誤りが7枚も見つかった。

災害史の出版物やインターネットの掲示を見ると、昭和三陸津波の写真を明治三陸津波と誤用している例も散見された。

それ以来、筆者は三陸沿岸に調査に行く場合、昔の写真のプリントを持参して現在の姿と比定するように心がけてきた。

8.1 ストリートビューで事前調査

具体的には山の稜線や入江の形状などのランドマークが役に立つ。海岸線は長い年月の間に埋め立てられ、海側にせり出していることが多い。近年はグーグルアースとストリートビューを使って事前に机上で地点を絞り込むことが可能になった。この方法で次の例をはじめ多くの撮影地点が特定できた。

宮城県気仙沼市唐桑町の鮪立漁港(図15)、南三陸町志津川の権現浜(図20)、志津川の新井田川周辺(図21)、岩手県大船渡市の末崎町細浦(図16)、宮古市鉾ヶ崎町(図17)、山田町の田ノ浜(図18)と船越(図19)、大槌町(図22)、陸前高田市小友町(図23)、釜石市の両石(図24, 26)と水海(図25)。

現地踏査を重ねると、それぞれの現場の後背地の高い場所にはたいてい社寺があり、そこから俯瞰して撮ったと思われるケースが多いことに気づいた。

以下に写真で往時と現在の姿を対比して示す。



a)



b)

図 15a 1896 年 6 月, 津波で被災した宮城県唐桑半島の鮎立漁港(唐桑半島ビジターセンター蔵)

図 15b 2011 年 3 月 11 日, 東日本大震災で被災した鮎立漁港(鮎立の鈴木盛男氏撮影)

Fig.15a This photo shows tsunami-hit Shibitach fishing port on the Karakuwa Peninsula in Miyagi Prefecture in June, 1896. (Karakuwa Peninsula Visitor Center Collection)

Fig.15b This photo shows Shibitachi fishing port in Miyagi Prefecture on March 11, 2011, after the Great East Japan Earthquake and tsunami devastated the region. (Photo by Morio Suzuki in Shibitachi)



a)



b)

図 16a 1896 年 6 月, 高橋直寿が撮影した岩手県大船渡の細浦漁港の惨状(雑誌『太陽』より)

図 16b 2011 年 3 月 11 日, 東日本大震災で被災した細浦漁港(無茶茫茫氏のホームページより)

Fig.16a This photo, taken by photographer Naoju Takahashi, shows tsunami-hit Hosoura fishing port in Ofunato, Iwate Prefecture in June, 1896. (Magazine Taiyo)

Fig.16b Hosoura fishing port was devastated by the Great East Japan Earthquake and tsunami on March 11, 2011. (Blogger Mucha Bobo's website)



a)



b)

図 17a 1896 年 6 月, 末崎仁平が撮影した岩手県鯨ヶ崎町の惨状(岩手県立博物館蔵)

図 17b 2013 年 7 月現在の同一地点. 埋め立てで海岸線がせり出している.

Fig.17a This photo, taken by photographer Nihei Matsusaki in June, 1896, shows the devastated town of Kuwagasaki in Iwate Prefecture. (Iwate Prefectural Museum Collection)

Fig.17b The same location as Photo a) shows a protruded coastline due to reclamation in July 2013.



a)



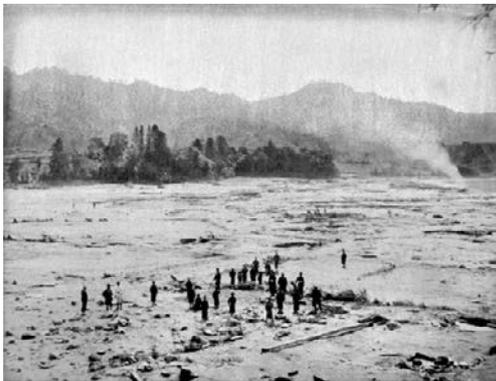
b)

図 18a 1896 年 6 月，高橋信三郎が撮影した岩手県山田町田ノ浜の惨状(宮内庁書陵部蔵)

図 18b 2018 年 5 月現在の田ノ浜

Fig.18a This photo, taken by Shinzaburo Takahashi, shows Tanohama in Yamada town, Iwate Prefecture, after the killer tsunami in June 1896. (the Imperial Household Archives Collection)

Fig.18b Tanohama in May 2018.



a)



b)

図 19a 1896 年 6 月，高橋信三郎が撮影した岩手県山田町船越・前須賀海岸の惨状(宮内庁書陵部蔵)

図 19b 2018 年 5 月，防潮堤建設が進む前須賀海岸

Fig.19a This photo, taken by photographer Shinzaburo Takahashi, shows Maesuka Beach in Funakoshi in Yamada town, Iwate Prefecture after the tsunami in June 1896. (the Imperial Household Archives Collection)

Fig.19b A coastal levee under construction on Maesuka Beach in May 2018.



a)



b)

図 20a 1896 年 6 月，国府留蔵が撮影した宮城県志津川町権現浜に対岸の細浦から漂着した民家

図 20b 2018 年 5 月現在の権現浜

Fig.20a This photo, taken by Tomezo Kunifu, shows houses swept away from Hosoura to Gongenhama in Shizugawa, Miyagi Prefecture, in June 1896.

Fig.20b Gongenhama in May 2018.



a)



b)

図 21a 1896 年 6 月, 国府留蔵が撮影した宮城県志津川町の新井田川付近で犠牲者を供養する僧侶
 図 21b 2018 年 5 月現在の同一地点. 左後方の建物は東日本大震災で住民 327 人が屋上に避難して助かった高野会館

Fig.21a This photo, taken by Tomezo Kunifu, shows monks praying for victims of the earthquake and tsunami near Niidagawa River in Shizugawa town, Miyagi Prefecture, in June 1896.

Fig.21b The same location as Fig.21a in May 2018. In the rear is the Takano Kaikan building to whose rooftop 327 residents fled to safety after the Great East Japan Earthquake and tsunami.



a)



b)

図 22a 1896 年 6 月, 高橋信三郎が撮影した岩手県大槌町の惨状(宮内庁書陵部蔵)

図 22b 2017 年 5 月現在の同一地点

Fig.22a This photo, taken by Shinzaburo Takahashi, shows heavily devastated Otsuchi town, Iwate Prefecture, in June 1986 (the Imperial Household Archives Collection).

Fig.22b The same location as Fig.22a in May 2017.



a)



b)

図 23a 1896 年 6 月, 込山英松が撮影した陸前高田市小友町で収容された犠牲者(雑誌『太陽』より)

図 23b 2017 年 5 月現在の同一地点

Fig.23a This photo, taken by Hidematsu Komiyama, shows the bodies of disaster victims in Otomo village in Rikuzentakata in June 1896 (Magazine Taiyo).

Fig.23b The same location as Fig.23a in May 2017.



a)



b)

図 24a 1896 年 6 月，高橋信三郎が撮影した岩手県釜石市両石町の惨状(宮内庁書陵部蔵)

図 24b 2018 年 6 月現在の同一地点

Fig.24a This photo, taken by Shinzaburo Takahashi, shows heavily devastated Ryoishi town in Kamaishi, Iwate Prefecture, in June 1896 (the Imperial Household Archives Collection).

Fig.24b The same location as Fig.24a in June 2018.



a)

しに字小の村石両郡伊閉南中陸へ村岩水
す變く原沙の帯一矢流部全戸十數數戸て



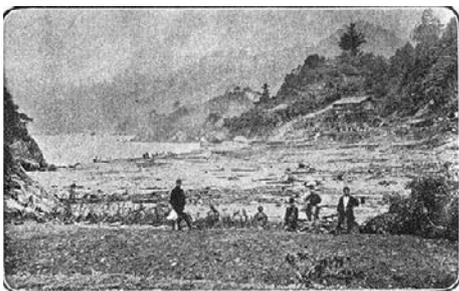
b)

図 25a 1896 年 7 月，東京朝日新聞付録に掲載された岩手県釜石市水海の惨状

図 25b 2017 年 5 月現在の同一地点

Fig.25a The Tokyo Asahi Shimbun ran this photo of Mizuumi in Kamaishi, Iwate Prefecture, in July 1896.

Fig.25b The same location as Fig.25a in May 2017.



a)

地害被石雨
SCENE OF DISASTER AT RYOISHI.

(陸中花巻照井政太郎氏撮影)



b)

図 26a 1896 年 6 月，高橋直寿が撮影した岩手県両石の惨状(雑誌『太陽』より)

図 26b 2018 年 6 月現在の同一地点

Fig.26a This photo, taken by photographer Naoju Takahashi, shows tsunami-hit Ryoishi in Kamaishi, Iwate Prefecture (Magazine Taiyo).

Fig.26b The same location as Fig.26a in June 2018.

§9. おわりに

2012年春から4年間の調査で、これまで少ないとされてきた明治三陸津波の写真記録が、約250枚存在することが明らかになった。新聞・雑誌の記事や行政文書と照合することで、撮影地と撮影者の解明も進んだ。

盛岡地方気象台に末崎仁平撮影の鉾ヶ崎と田老のキャビネ原乾板が残っていたのは、災害史と写真史の両面で有意義と考える。同気象台は、保管と活用に万全を期すため、乾板一式を2020年3月、岩手県立博物館に寄贈した。同博物館は2020年秋に開館40周年を迎える。その記念企画展「みる！しる！わかる！三陸再発見」の「災害と暮らし」のコーナーで、これらの写真を展示する予定である。開催時期は新型コロナウイルスのため2021年以降になりそうだ。

明治三陸津波写真の大部分が、宮内庁書陵部に納まっていることには驚かされた。『諸国災害実況写真』は明治期の災害写真の宝庫である。今後、書陵部での調査が進み、書陵部データベースで全画像が公開されることを期待したい。

謝辞

査読者の種々の指摘と助言は本稿の改善に大変有益でした。後押ししてもらい、表や地図の作製が実現しました。書陵部の白石烈氏には書陵部所蔵資料についてご教示いただきました。

徳島大会(2019)で口頭発表した際、本研究会会員の高岸冨佳氏より、国会図書館で検索したところ、『太陽』に掲載の「照井政太郎」は「高橋直寿」の誤りと伝える正誤表が出ている、との指摘をいただきました。国会図書館が提携している「ジャパンナレッジ」は、復刻版の『太陽』全巻をデータベースで公開していて、この「正誤」を照井の項に注意喚起として掲示していました。筆者は、当該の写真掲載号しか見ておらず、全くの盲点でした。

お三方に心より感謝します。

対象地震:1896年明治三陸津波

文献

秋好善太郎, 1914, 日本歴史写真帖近古の巻, 明治二十九年三陸東海岸大海嘯被害の実況, 東光園, 109-112.
朝日新聞社, 1990, 相次ぐ天災・三陸津波の惨害, 朝日新聞社史明治編, 330-332.
大日本写真品評会, 1896, 雑報, 写真雑誌, 12, 34.
玄鹿館, 1896, 雑報, 写真新報, 82, 141.
橋本久夫, 2013, 月刊みやこわが町9月号写真集鉾

ヶ崎 Part 2 明治29年6月15日 三陸大津波編, タウン情報社, 20-39.

林誠, 2014, 明治三陸津波の新聞報道と絵画, 長野県立歴史館研究紀要, 20, 26

伊木常誠, 1897, 三陸地方津浪実況取調報告(参照第一), 震災予防調査会.

石黒敬章, 2013, 明治の三陸大津波の写真, 研究発表会要旨集, 日本写真芸術学会, 23.

岩手県西南閉伊郡役所, 1896a, 岩手県陸中国南閉伊郡海嘯紀事, 釜石臨時救恤事務所日誌, 85-100.

岩手県西南閉伊郡役所, 1896b, 岩手県陸中国南閉伊郡海嘯紀事, 釜石臨時救恤事務所日誌, 90.

岩手日報, 2012, 4月22日付記事, NY紙が当時掲載.

金子隆一, 2005, 1880年代における日本の写真状況と磐梯山噴火写真, 中央防災会議, 141-150.

川原由佳里, 2011, 1896(明治29)年明治三陸海嘯における日本赤十字社の救護活動, 日本看護歴史学会誌, 24, 37-54.

中里進, 1980, 写真集明治大正昭和 八戸 ふるさとの想出 121, 図書刊行会, 88-89.

日本赤十字社宮城支部, 1898, 日本赤十字社宮城支部海嘯救護記事.

日本赤十字社宮城県支部, 1987, 星霜百年.

日本赤十字看護大学, 末崎仁平の鉾ヶ崎写真, 日本赤十字看護大学所蔵史料データベース <https://redcross-nursing-history.jp/search/>

日本写真協会, 1952, 日本写真界の物故功労者顕彰録.

沼田清, 2018, 唐丹の津波石の捏造者は込山英松, 歴史地震, 33, 205-208.

大橋乙羽, 1896a, 蒼田碧海録, 太陽, 博文館, 2, 14, 258.

大橋乙羽, 1896b, 東奥大海嘯, 太陽, 博文館, 2, 14-16

大橋乙羽, 1896c, 東奥大海嘯, 太陽, 博文館, 2, 14-16

大橋乙羽, 1896d, 正誤通知, 太陽, 博文館, 2, 18, 260.

佐藤振寿, 1980, 新聞写真の軌跡(3), カメラ毎日, 毎日新聞社, 27, 9, 188-191.

Scidmore, E.R, 1896, The Recent Earth-quake Wave on the coast of Japan, National Geographic September 1896.

白石烈, 2016, 明治・大正両時代御手許写真の来歴, 書陵部紀要第 67 号, 宮内庁書陵部, 53-73.

書陵部所蔵資料目録・画像公開システム, <https://shoryobu.kunaicho.go.jp/>

書陵部宮内公文書館, 海嘯被害図, 書陵部所蔵資料目録・画像公開システム

<https://shoryobu.kunaicho.go.jp/Search?fields%5B0%5D.value=%E6%B5%B7%E5%98%AF%E8%A2%AB%E5%AE%B3%E5%9B%B3&fields%5B0%5D.DataType=string&searchType=Freeword&start=1>

高橋信三郎, 岩手県下海嘯被害地写真, 書陵部所蔵資料目録・画像公開システム

<https://shoryobu.kunaicho.go.jp/Toshoryo/Detail/1000519220000?searchIndex=0>

武部敏夫, 2000, 明治の日本 宮内庁書陵部所蔵写真, 国府留蔵写真 6 枚, 吉川弘文館, 30-31.

東北日報, 1896a, 7 月 15 日付記事, 國府写真師の名誉

東北日報, 1896b, 6 月 23 日付特派員松本新の記事.

東京朝日新聞, 1896, 7 月 15 日付別刷り付録 三陸東海岸大海嘯被害図.

東京日日新聞, 1896, 7 月 2 日付気仙郡末崎細浦被害の図.

東奥日報, 1896, 7 月 16 日付記事と 18 日からの広告.

東洋文化協会, 1933, 幕末・明治・大正回顧八十年史第 5 輯, 三陸の大海嘯, 224.

津波デジタルライブラリィ, 1896 年明治三陸津波(幻灯版)

<http://tsunami-dl.jp/old-content/TSUNAMI/movie/video.html>